

校名：北海道教育大学附属釧路小学校

所在地：〒085-0805 北海道釧路市桜ヶ岡 7-12-48 電話番号：0154-91-6322

記載日：平成 28 年 5 月 20 日 記載者：林 政孝 記載者役職：副校長

校風、おおまかな特色について

本校は、平成 16 年度から国立大学法人北海道教育大学附属釧路小学校と改称し、今年度で移行 13 年目、開校 48 周年を迎える。全国国立大学附属学校で最東端の厳しくも豊かな自然条件の下で保護者と先生方が協力して「たくましい北国の子」の育成に努めている。

本校は、丹頂が舞う豊かな自然を有し、水産、製紙、石炭を基幹産業として 17.5 万人の人口を擁する釧路市の東南、眼下に太平洋を望む住宅地に位置している。白樺台の林の中には、かつて校舎周辺に群生していたオオバナノエンレイソウをはじめとする四季を代表する草花が釧路の短い夏に咲き誇る。釧路湿原や阿寒といった国立公園、北海道立自然公園も近く、それらの環境を活用した自然体験学習を行っている。

現校舎は、昭和 44 年 12 月に新築落成し、北海道教育大学教育学部附属学校として附属中学校とともに同一キャンパス内に位置する。連携した運営、研究交流を図りやすい環境に加え、新築当時から低学年ブロックには「プレイルーム」が設置され、学習活動に有効活用されてきている。平成 6 年にはインターロッキング工法による「青空広場」が、平成 20・21 年度には後援会から複合遊具、そして、平成 22 年度には釧路市内には例がない巨大な「砂場」が寄贈され、「附小の森」の魅力がさらに充実し、子供たちの体験学習の広がりや保障している。さらには、平成 18 年度から北海道教育大学釧路校が小学校教員養成を主たる目的として再編されたことを受け、平成 21 年 9 月に「新教育実践開発室」が完成し、多くの学生が本校で教育実習を行い、学びを充実させている。



開校 40 周年（平成 20 年）航空写真

卒業生の活躍状況について 追跡調査及び把握はしていない

勤務経験者が公立学校・教育委員会などへ戻った後の活躍状況について

- ① 追跡調査（把握）している
- ② ほぼ把握できている（勤務経験者による「附小会」）
- ③ <旧職員数> 学校長 11 名、教諭 87 名、養護教諭 6 名、栄養教諭 2 名
<旧職員（教諭）の現況 * 現職で把握できている分>
町教育委員会教育長 1 名、校長 10 名、教頭 8 名、行政 3 名、一般教諭 19 名

魅力や特色のある、また、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取組①

全学年「英語の授業」を実施

中学校の英語への円滑な接続を図るために、小学校各学年の評価基準でもある Can-Do リストや、蓄積型発展教材スノーマンの作成・検証に取り組んでいる。

平成 25 年度から、文部科学省から研究開発学校の指定を受け、第 1・2 学年は年間 17 時間（2 週間に 1 時間）、第 3 学年以上は年間 35 時間（週 1 時間）の英語の授業に、各学級担任

が中心になって取り組んでいる。

第1・2学年は、「挨拶」「身近なものの名前」などを、歌や身体を動かす活動を通して楽しく学ぶ。第3・4学年は、簡単な英語を用いて「話すこと」、「聞くこと」を中心に友達とのコミュニケーション活動を行う。第5・6学年は、「話す」「聞く」を中心としたコミュニケーション活動に加え、「読む」「書く」など文字にも親しみながら様々な活動を行う。

隔週でALTが来校し、全学級の授業に参加してくれる。ALTは全て英語によるコミュニケーションだが、回数を重ねるたびに子供たちも慣れてきている。



魅力や特色のある、また、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取組②

自然体験活動の充実

平成22年度から、一般財団法人前田一步園財団との自然環境教育共同プロジェクトとして、阿寒湖畔の森をフィールドとした活動を、年間1～2回程度、第2学年以上で生活科・社会科・理科の学習の一環として実施している。

教室の中だけでは実感することのできないことを直接体験することによって、実感の伴った「知」へと高めることができる。また、第2学年から第6学年まで継続して同じフィールドに出かけていくことよって、阿寒湖畔の森の壮大さを感じるとともに、環境を身近に感じ親しむことができる。さらに、学校の教員以外の「地域の先生」と継続的に関わる機会を持つことよって、人と関わる楽しさを感じたり、「社会の一員」としてどうあるべきなのかを考えたりすることができる。



流水の働きと川の様子（5年）



樹木を鹿の食害から防ぐネット巻き体験（6年）

魅力や特色のある、また、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取組③

系統的な集団宿泊的行事の実施

異学年交流や集団宿泊、自然体験活動などを通して、仲間のよさを見つめ直したり、公共の場におけるマナーやルールを身に付けたり、まち探検や化石発掘などの普段なかなかできない学習を行ったりする「みどりの学校」という行事を行っている。

第1・2学年は、「ちびっこみどりの学校」として、朝から夕方まで、学校の敷地内で、第2学年の子が中心になって、基地づくりなどをして合同で遊ぶ。

第3学年は、「校内みどりの学校」として、1泊2日の日程で、学校に宿泊しながら、釧路市内をフィールドに社会科の学習と関連を図った地域探検を行う。

第4・5学年は、「厚岸みどりの学校」として、第4学年は1泊2日、第5学年は2泊3日の日程で、ネイパル厚岸に宿泊しながら、施設周辺や厚岸町内をフィールドとした活動を行ったり、第5学年がリーダーシップを発揮しながら2学年が交流する活動を行ったりする。

第6学年では、「常呂みどりの学校」として、3泊4日の日程で、ネイパル北見に宿泊しながら、化石発掘、カーリング体験、野外炊飯、施設見学などの活動を行う。



基地づくり（1・2年）



キャンプファイヤー・フォークダンス（1・2年）



釧路市北大通探検（3年）



ネパール厚岸での宿泊・班会議（4・5年）



厚岸町内フォトラリー（5年）



化石発掘体験（6年）

魅力や特色のある、また、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取組④

安全・安心な自校給食による食育の推進

子供たちの嗜好や成長に合わせた給食を提供するため、栄養教諭と養護教諭とが連携し、栄養摂取基準を決め、北海道産・国産の食材（根菜類は無農薬・低農薬の野菜）を使用しながら、衣をつけるところから一つ一つ手作業で行うなど、手作りを基本とした給食を提供している。

近年増加傾向にあるアレルギーにより食べられない物がある子には、代替食（牛乳の代わりに豆乳、魚の代わりに肉や大豆など）で対応している。

入学して間もない時期は、給食に少しずつ慣れていけるよう、動物パン→おにぎり給食→温食追加という段階を踏んで進めている。また、郷土料理、世界の料理など、食文化へと学びをつなげられるよう行事食を実施するとともに、毎月19日を「食育の日」とし、栄養教諭から

の講話や残量調査等を行っている。そして、それらの集大成（6年間のまとめ）として、自己管理能力を身に付けているかを確認する「バイキング給食」を実施している。



バイキング給食（6年）



世界の料理「タイ」

地域における現在の本校の存在価値

大学と連携しながら、先進的で汎用性がある教育研究を行っていくことである。

各教科等において、大学の教員を研究協力者として招聘しながら、研究理論に基づいた実践的教育研究を行い、その成果を検証し、公開研究会を行っている。

また、地域はもとより、道東地区の公立学校、教育機関、研究団体と連携し、教育支援を行っている。具体的には、北海道教育委員会と連携した「授業実践交流事業」を平成25年度から実施している。これは、附属学校教員が地域の公立学校からの要請を受けて出前授業をしたり、校内研修の講師を担当したりするとともに、公立学校教員による附属学校の授業観察を日常的に受け入れるものである。

附属学校（本校）の存在意義

大学と連携しながら、教育実地研究としての教育実習を行うとともに、教育実習の体系化を図り、教員養成の中心的な役割を果たすことである。

北海道教育大学釧路校では、入学直後の大学1年生の時から継続的・体系的に教育実習が行われる。

「教育フィールド研究」では、1年生が年間12日、2年生が年間16日、学校現場に入り、子供たちと一緒に活動したり、授業参観や校舎内外の環境整備をしたり、行事に参加したりすることを通して、学校の教育活動や教師の指導について学ぶ。

「基礎実習」では、2年生が、3年生の「教育実習Ⅰ」の期間中の5日間、授業観察や復元指導案の作成等を通して、授業観察のポイントや児童生徒理解・学級づくりの方法や留意点等について学ぶ。

「教育実習Ⅰ」では、3年生が、8月下旬から9月の5週間、シャドーイングや実践を通して、授業の全体的な展開や学級経営等、教員として必要な実践的指導力を身に付ける。

「教育実習Ⅱ」では、4年生が、7月の2週間、「教育実習Ⅰ」とは異なる学校種における実習を通して、多様な実践的指導力を身に付ける。

これらの教育実習を受け入れ、教員養成に寄与している。

